松　風

福島県公立学校退職校長会

郷土の祭り紹介……1
論壇、随想……2
社会貢献活動の先例に学ぶ……3
県教委への要望活動・懇談会……4
高校長協会・小中校長会との懇談会、他…5
趣味と生きがい、他……6

〒960-8107 福島市浜田町4-16 富士ビル2階
TEL（024）534-5411
FAX（024）531-1195

山車運航

大寄せ

渡御行列

郷土の祭り紹介

ふるさとを思う心を育む

東白川支部　藤田　充

どこの町も同様でしょうが、塙町にも地域ごとに特色あるお祭があります。

ここでは大字塙地区で行われている出羽神社例大祭を紹介します。塙町の中心部にある羽黒山頂にあった神社が明治になり出羽神社と改称され、以来、当時の塙三か村（竹之内村、塙村、下渋井村）の総鎮守として守り継がれています。例祭は、毎年十一月三日に行われますが、戦後になり、三年に一度の大掛かりな「例大祭」が執り行われています。祭当日は羽黒山の山頂より神輿をおろし、「渡御行列」が行われます。町内六区に設けられた御仮屋を巡回し、御仮屋ごとに安全・無事を祈願する祭事を行います。翌日は、各区から、さまざまな山車が繰り出されます。それぞれの山車の壇上では、小中学生による祭囃子が披露され、当該区の老若男女、幼児に引かれ町内を巡回します。最後には駅前交差点に計六台の山車が一堂に会し、祭りの集大成として「大寄せ」が行われます。各区の演奏が順々に披露されたのち、全体で太鼓と祭囃子の共演が行われ、大変な盛り上がりとなります。

ところで、この祭囃子の練習が毎回大変です。二カ月以上前から各区の小学生が練習に励みます。代々引き継がれてきた指導者の壺にはまった指導により、ついには山車の壇上で立派に演奏できるようになります。子どもたちにとって「成功体験を積む」無くてはならない伝統行事になっているものと思います。

コロナ禍により平成三十年以降の例大祭は中止となっています。少子化で、祭囃子を担う子どもたちが不足してきていますが、例大祭は、子どもたちにとって「ふるさとを思う心」を培う大切な行事です。是非、時代に応じて工夫を加えながら、継続してもらいたいと願っております。

論壇

楽しく充実

副会長　栗林　正樹

定年退職の平成十九年四月から、私は西白河支部に入会し、文書配付係として町内の七軒を回ると「おっ、上がれ、文書係か」と言われ、大先輩の昔の学校教育や人間関係など楽しく伺ったこともあった。次からは、こっそり行っても、見破られ断り切れず、つい長居を。係は五年ほど続け次の方にバトンタッチした。

現在は支部長として副支部長と共に、喜壽・米壽・珍壽を迎えた方の自宅に伺い、賀詞や記念品を贈呈し、いろいろとお話を伺って来る。皆さんご自分の校長経験談や人生訓を話して下さる。含蓄に富むお話が多い。

さて私は先輩方のように八十八の米壽まで、あと十三年、父も元気に生きたその年まで生きられるだろうかと思えてくる。

退職校長会は会員の健康長寿のために何か貢献できないだろうかと考えると、人との交流や運動が大事であるから、クラブ活動参加を進めたい。でも、現在の西白河支部会員百四十八名中、ゴルフが約四十名、里山と囲碁は十名前後である。

今は定年退職すると校長、教諭の再任用、新採用指導教員、講師や、市町村の幼稚園やこども園の園長、支援員、教育長、公民館長や社会教育主事など六十代は働いていることが多い。だから、退職校長会の役員やクラブ入会も難しい状況にある。もちろん、仕事をしながらもあるいは七十過ぎても、評議員や理事を引き受けて下さる方もいることには感謝している。

私が入会した頃は、俳句川柳、水石、版画、絵画、登山、将棋など多くのクラブがあり、春の総会懇親会の折には、会場狭しとばかりに展示発表が多数あった。

高齢になるほど交流は少なくなりがちなので、他支部の例等を参考にしながら、俳句川柳、歴史探訪、野菜栽培、スマホタブレットの使い方、健康運動、散歩散策、高齢先輩交流、幼稚園学校ボランティアなどのクラブや定期的な研修会、交流会について、場所や予算、安全確保など、運営面の問題等もあるので、慎重に検討を重ね、一つでも立ち上げたいものである。

会員の皆さんのさらなる健康長寿を願いながら、大先輩方の教えなどを踏まえて、自らの来し方を振り返るとともにこの先を考えてみると、楽しく交流することによって、より充実した生活を送ることができるようになるのではないかと思うのである。

随想

「懐メロを歌う会」

相馬支部　村山　正之

「懐メロを歌う会をつくろう」と友人から話があったのは、あの東日本大震災からようやく立ち直りつつある頃であった。

二〇一五年夏から町民体育館の一室に月二回集まっている。いつも十六、七名である。『童謡・唱歌・懐かしの歌』（西東社）を各自購入して、それぞれが本の中から自分の好きな曲を選び、それを「みんなで歌う」という形である。本以外のリクエスト曲は、コピーして配る。現在まで三百以上の曲を歌っている。

伴奏は、「禁じられた遊び」もマスターしてない拙い私の自己流ギター一本である。コードの変化の対応に精一杯だが、少しでも人のためになっていると思うと嬉しい。

毎回一時間半、一人一曲選ぶと、丁度全員一廻りする感じの歌の会であり、最後には全員で「故郷」を歌う。明治、大正の童謡や唱歌、昭和の歌謡曲、デュエット曲やフォークソング、地元相馬の歌もある。

歌い出すと、若い頃の自分、友達、家族、美しく哀しい想い、世相など様々な事柄が浮かんでリンクする。「歌は世につれ世は歌につれ」である。

因みに、昨年度のリクエスト回数ベストテンは、「北の旅人」「恋の町札幌」「野に咲く花のように」「高原列車は行く」「紅葉」「北上夜曲」「美しい十代」「旅人よ」「青い山脈」「冬の星座」だった。

美しい言葉を紡いだ詞に癒され、歌に笑顔も付いてくる。音はすぐ消えるが、想いは生きている限り永遠、正に懐にあるメロディーである。人とつながる心地良さ、音が聞こえる幸せを思う。

社会貢献活動の先例に学ぶ

株式会社アポロガス会長　篠木　雄司氏に聞く(2)

令和四年八月一日、福島市飯坂町八景にある株式会社アポロガス会長の篠木雄司氏に社会貢献活動等について伺った。

前号では震災後の主な取組（「四十年前の恩返し」、詩集『こころの幻燈会』発刊、「平成の飛梅」）を紹介した。今回はその後半部分を紹介する。

◇SDGsの取組など

《篠木氏》会長就任後、ドイツにバックパッカーとして行き、SDGsに関してフードロスの問題に取り組んでいるセカンドベーカリーのような形で売れ残ったパンを集めてきて売るパン屋さん、包装なしで売っているスーパー、おもちゃを修理再利用する玩具店などを見学してきました。

次の年は台湾に行きました。電動スクターが多く利用されていますが、バッテリーが無くなったら、充電するのではなくバッテリーを交換しすぐ使えるよう、いろんな所にバッテリーの交換所を置いていました。

これらのことは、小冊子にまとめ、社員にも知らせ役立てています。

会社では、高校などに回収ボックスを設置し、クリアファイル回収チャレンジなどに取り組んでいます。また、社会貢献活動的なグッズ（SDGsの取組を食に置き換えデザイン化したランチョンマットなどに使える）《食べるSDGs》もやっています。

また、「地球のために学ぶか未来をつくるために学べ、お金のために働くのではなく未来をつくるために働く、学びから行動へ」という話をしています。

実験の実演

◇コップを使った「人生の生き方の実験」

《篠木氏》二つのコップを使った人生の生き方実験です。コップに手を触れず、ペットボトルの水をいっぱい入れる。次に片方のコップを裏返し、どうぞと促す。実演者は困惑してしまう。

そこで、「どうして入らないのですか。コップの容量は皆さんが持っている能力。コップが上を向いているか下を向いているかは、皆さんの心の在り方です。心が上を向いている状態すなわち前向きな気持ち、素直な気持ちだと周りの人が水を入れるとどんどん入っていく。心が下を向いている状態、マイナス思考とか素直じゃない状況だと、周りの人がいくら水を入れようとしても一切受け付けない。だからこれから社会に出ても、これからの人生も素直な心で、前向きに生きることが大切なんですよ。」ということを伝えます。

また、これまでに学んだ六十七の言葉をまとめた「**人生のメッセージカード**」を一人一人に渡しています。そこには人生如何に生きるか、人生の三つの大切な心がけ（プラス思考で生きる、何でもやってみなくてはわからない、人の生きる目的は周りの人を幸せにする）などが書いてあります。

原発事故があった福島から、子どもたちの心が前向きになってほしいとの願いからです。

◇《佐藤俊市郎会長》福島に思いを寄せる力はどこから？

《篠木氏》一番の発露はアメリカです。新聞配達をやって、香港、アメリカに行きました。香港からの帰りの飛行機の中で隣りあわせになったワシントンDCに住む牧師さんの卵と知り合いました。その後、アメリカに一年間留学し、ワシントンDCに住みましたが、一か月ちょっとで具合を悪くしてしまいました。その時助けてくれたのがあの牧師さんの卵の方でした。無償というか、人種も言語も違うのに何の見返りもなく助けてもらいました。その時、大人になったらその恩返しができるような人間になりたいと思いました。

◇思いを寄せる力は恩返しのエネルギー

その体験があって、貸してもらったものは返さなければならないといった、恩返しのエネルギーというのが強いと思います。困ったときに手を差し伸べられる社会が幸せな社会だと考えています。

この取材を通して、篠木会長の福島や社会に寄せる思い、人に寄せる強い思い、さらにはその行動力に触れることができた。

その思いや行動力こそが社会貢献そのものではないだろうか。

多くの時間を割いて貴重なお話を頂いたことに、心より感謝したい。

県教委への要望活動

要望書の手渡し

令和四年七月二十八日、県庁西庁舎三階教育委員室にて佐藤俊市郎会長より大沼博文県教育長に「要望書を直接手渡し、「県教育長との懇談会」を実施した。

要望書の手渡し

◇**主な要望内容**

○本県学校教育の復興・創生・充実のため、教育諸条件のさらなる整備・充実を要望した。

・新型コロナウイルス感染拡大防止対策徹底のための予算の確保

・「誰一人も取り残さない」社会の実現のため新学習指導要領を踏まえたＥＳＤ・ＳＤＧｓの推進・県立学校の特色化・魅力化が図れる予算の確保と優秀な教員の計画的配置

・教員の多忙化・働き方改革等に対応するための教員等の計画的採用増と研修の充実

・加配教員、支援員、スクールサポートスタッフ等の継続的配置と拡充・復興加配の継続とチーム学校推進のための定数改善

・ＳＮＳ等の問題に対応する部局を超えた体制の構築とネットリテラシー教育の充実

・ＩＣＴ環境の充実と情報教育担当指導者の確保

・行政・関係団体・県民等が連携した学校支援体制の整備及び教員の魅力の戦略的・計画的発信による優秀な教員の確保

・施設等の耐震化・老朽化対策による安全安心な教育環境の整備充実

○年金制度及び医療・福祉等の充実、退職者の再任用等を要望した。

県教委との懇談会

懇談会は、大沼博文教育長、教育次長、各課長等十一名、本会より佐藤俊市郎会長と事務局員七名が出席し開催された。

はじめに、佐藤会長が新しく教育長になられた大沼博文教育長に祝意を述べ、日々本県教育の向上充実にご努力いただいていることに敬意と感謝を申し上げた。また、教員の確保と教育施設・設備の整備についてお願いを申し上げた。続いて、大沼教育長より「発足以来、組織力を生かし本県教育の推進に多方面からご支援をいただいておりますことに敬意を表します。震災原発事故から十一年が経過し、今後も復興再生に向けて様々な課題を乗り越えていきます。県教委では第七次福島県総合教育計画を策定し「学びの変革」を柱に子どもに必要な資質・能力を育成するため学校の在り方の変革を目指し、退職校長会の皆様との思いを共有して取り組んでまいります。」等のご挨拶をいただいた。

懇談会では、福士事務局長が要望書の説明に加え、「新型コロナウイルス対応」「新学習指導要領全面実施における環境整備」「教員の魅力発信と優秀な教員の確保」等について話題提供をした。

これらに対し、各課長等から施策も含め次のような説明があった。

○新型コロナ感染防止のため、保健所や学校医等との相談連絡体制を整え迅速に対応し、サーベイランスシステムなどの利用を促し、連絡体制の構築に努めている。

○小中学校では、ＩＣＴの効果的な活用法、情報モラル教育を重点事項とし、ＳＮＳ等の課題には子ども未来局、県教委、県警本部の連携事業により対応している。

○高等学校では、情報Ｉの授業充実に資する情報部会の講習会を開催するとともに、専門的知識技能を有する人材の採用を継続する。

○被災地区での極少人数というメリットを生かしたふるさと創造学を柱とする学校教育の活性化について県教委としても支援していく。

○第二次福島県立特別支援学校全体整備計画を進めており、安達、南会津地区での開校を目指し準備を進めている。

○学校、地域のニーズを組み合わせながら教育活動を充実していく地域との協働活動事業を展開している。

○福島大学と連携し、養成段階から教員を目指す学生に教員の魅力を発信することを継続していく。

最後に、飯沼副会長が教育課題に向けた様々な取組に感謝を述べるとともに、今後も効果的な対策を講じていただけるようお願いし、閉会した。

懇談会の様子

県教委との懇談会に備えて
相互理解と協力強化のために

県高等学校長協会との懇談会

県高等学校長協会との懇談会

令和四年六月二日(木)、福島東高等学校において懇談会を実施した。主な内容は次の通り。

◇**高等学校の現状**
○コロナ感染症防止対策
○コロナ禍での行事の持ち方と学校文化の継承
○探究活動や地域連携
○県立高校の魅力化
○単位制やコース制の導入
○観点別評価のあり方
○教科情報の受験対策
○新学習指導要領実施上の課題と観点別評価
○高校入試のあり方
○県立高等学校改革計画
○施設・設備の充実と更新
○多忙化解消と部活動指導
○教員のやりがい維持
○就職支援

◇**特別支援教育の現状と課題**
○第二次全体整備計画による新たな地域拠点の開設
○大量退職に備えた専門性の継承

県小・中学校長会との懇談会

県小・中校長会との懇談会

令和四年七月四日(月)、福島市吾妻学習センターで実施。次のような内容で懇談した。

◇**生徒指導部調査結果より**
○不登校やいじめ問題対応に関わるSCやSSWの継続配置及び勤務日数、勤務時間の増加
○タブレットやインターネット活用に関わる情報教育の環境整備

◇**行財政部調査結果より**
○学校と児童生徒数の減少
○特別支援児童生徒数の増加に伴う指導体制及び環境整備の推進
○教員及び加配・補正教員の確保と人材の育成

◇**被災地区等における現状**
○学校統廃合の状況
○今後の学校経営に向けた復興推進加配の継続及び人材の確保・配置

◇**端末の活用**
○活用に向けた研修プログラム計画・実施及びICT支援員の確保と配置

支部長会報告

今年度の支部長会は、新型コロナウイルス感染症の蔓延状況を考慮し、九月の実施予定を延期し、令和四年十一月四日(金)に、感染防止対策を徹底して福島市吾妻学習センターで行われた。内容は次の通り。

◇**報告事項**
・令和四年度事業実施状況
・今年度会員数…二千六百九十七名、新入会員数…九十一名（入会率七十四％）
・会費納入状況
・会計中間報告
・教育懇談会
・ぬくもり基金
・物故会員数：四十六名（十月十七日現在）

◇**協議事項**
○次年度県大会（郡山大会）
・令和五年六月十四日(水)郡山ビューホテルアネックスで開催
○令和五年度の活動について
・重点目標
・運営ビジョン
・デジタル化ビジョン
・要望活動の方針
・予算編成方針・予算
・教育懇談会
○福島県公立学校退職校長会ホームページについて
○「ぬくもり基金」の活用
○会員名簿の作成・配付方法の変更

◇**その他**
・第四十八回東北地区退職校長会協議会報告
・令和五年度「寿詞・賀寿・賀詞」該当会員名簿
・令和五年高齢者叙勲該当者名簿
・免除会員の全連退会報の配付計画
・通帳名義の変更
・各支部広報誌提供のお願い
・デジタル化推進支部補助

支部長会の様子

趣味と生きがい

埃はらって心ほころぶ

福島支部
齋藤　吉成

固まったコーラルレッドのチューブの蓋をペンチで挟む。ひねった瞬間底から絵具が滲み出し、左手の指はまっかっか。情けない思いでペンチを筆に持ち替え、指の絵具を拭って頬に朱をおくと、孫の顔にやっと生色がさす。

明日、休み。もう少しやるかあ……。

退職の年に初孫が生まれ、退職後に迎えた初節句。その祝いの席で思い出しました。娘が生まれたときもあの絵具箱を開けたことを。

あの絵具箱は、初めてのボーナスを注ぎ込んだ私の垂涎もの。娘が二人になってからも、それぞれの成長の記録として作品は増えましたが、次第に仕事に追われ、いつの間にかあの絵具箱は屋根裏で埃にまみれていました。

孫の誕生が、埃をはらういい機会となったわけです。自由になる時間が増えて、描く号数も20、50、80と広がりました。孫も四人。モデル選びに頭を悩ませながら、一人一人の「いま」を画布に描きとめ、心ほころぶひとときを楽しんでいます。

令和３年度県展『母の日・公園にて』（F50）

俳句とともに

北会津支部
湯田　一秋

立秋の朝、散歩で家の近くのお寺の前を通った。いつもの坊さんでなく、若奥さんが鐘を撞き始めた。

秋立つや
弱く鐘撞く坊の妻

さらに進むと、飯盛山の奥の背炙山が鮮明に見えた。

秋になって空気が澄んで来たのだろう。七台の風力発電の風車がゆっくり回っている。

新涼の嶺に
真白き風車（かざぐるま）

道端には、薄の穂が朝の光を揺らしている。幼い頃、友と遊んだ草矢を作る。

知らぬ間に
さみしく老いぬ草矢打つ

四、五日たって十五夜。心配していたが、会津は雲一つ無い夜となった。月に誘われ夜道を歩く。

詩の道を月といざよふ
影法師

次の日、俳句の師から句集と手紙をいただく。

十六夜
青きインクの文を読む

あれあれ、土間からしきりに虫の音が響く。

明日の夜は
庭へ帰れよ土間の虫

俳句を生きがいとして、会津の里を満喫している。

福島県公立学校退職校長会ホームページ活用について

福島県公立学校退職校長会のホームページ開設から三か月が経ち、各支部の授業計画や会報が掲載されています。閲覧数も徐々に増え、「○○支部の会報に□□先生の記事が出ており、懐かしく読ませていただきました。」「スマホで見られて便利です。」といった声も聞けるようになりました。

今は、小学一年生からタブレットが与えられ、デジタル教科書を使う時代です。私たちも子どもたちに負けずにデジタル化を進めてみてはいかがでしょうか。

ぜひ、左のＱＲコードからホームページにアクセスしてみてください。

ホームページ
ＱＲコード

編集後記

本号三ページ目の「社会貢献活動の先例に学ぶ」には、アポロガス会長篠木雄司氏の話が載っています。篠木氏は、コップを使った「人生の生き方の実験」の講演をぜひ多くの高等学校や中学校、小学校でも実践していきたい意向です。機会があれば、活用してはいかがでしょうか。

さて、十一月に入って、新型コロナ感染者が増加しています。「第８波」が始まったと言われています。また、インフルエンザの同時流行も懸念されています。十分留意して過ごしたいものです。